

公共図書館における危機管理の施策と意識の実態 —豪雨による浸水被害の観点から—

中村 美咲

人命・資料・施設といった資源・資産を守るために、図書館という組織においても「危機管理」の考え方が重要視されている。図書館における危機管理については、特定の危機の対処に焦点を当てた先行研究が多数存在するほか、日本図書館協会より「危機管理マニュアル作成のための手引き」が発刊されており、ここでは危機管理マニュアルの作成や改訂作業を通じた図書館職員の「意識の向上」が重要であると強調している。これらの先行研究は、図書館の実務面での危機管理に偏っており、行政学・防災学等の他の分野における危機管理の考え方が取り入れられているものはわずかである。

本研究では、図書館における危機管理について、「豪雨による浸水被害」という危機について着目した。危機を特定の事象に絞ることで行政学・防災学等の他の分野からの学びが得やすくなること、近年の気象状況から豪雨による浸水被害が引き起こされるリスクが高くなってきていること、および「危機管理マニュアル作成のための手引き」において“浸水は図書館の最悪の被害となる”という強い表現で警戒されていることを理由にこの危機を選択した。また、豪雨による浸水被害に対する図書館における先行研究には、個々の図書館の被災事例や水損資料のレスキューに関する研究が多い。「どのような備えや対処を行えば減災につながるのか」といった危機管理の面からのアプローチも不足していると考え、先行研究の問題点として着目した。以上の問題点を解決するため、本研究では、被災事例を掘り下げつつ横断的に考察することで、図書館組織に必要な危機管理の施策や意識を明らかにすることを目的とした。

本研究では、まず文献調査によって、他の分野における危機管理の考え方と、「豪雨による被災経験のある図書館」の調査を行った。次に、被災経験のある図書館へインタビュー調査を行った。文献調査では、被災した図書館は水害に対し立地的に脆弱だったケースが多かったことや、被災時の対応によって減災に繋がった図書館が存在したこと等がわかった。またインタビュー調査では、被災時には「図書館職員」としてではなく「市職員」として、第一優先事項に「人命」を据えて行動していたこと、被災後はハード面・ソフト面から危機管理の施策を打ち出すことで意識をさらに高めていたことがわかった。

考察として特に、ソフト面から危機管理の施策と意識を高めるという「ソフト防災」の考えが図書館組織では現実的に有用ではないかという考察を行った。具体的には、自館の抱えるリスクの把握、職員間・職場内での日頃からの連携・意識の共有等が挙げられる。本研究の課題として、「減災」という面に着目したため「復旧」に関する考察ができなかったことなどが挙げられる。本研究の発展として、昨今の図書館職員の身分・雇用形態・運営方法の多様化という、図書館組織特有の環境下における危機管理について考察できると考える。

(指導教員 池内淳)